群像　第73巻　第3号（毎月1回1日発行）平成30年3月1日発行（2月7日発売）

創作一挙掲載

本谷有希子

「静かに、ねぇ、静かに」

本当の旅

奥さん、犬は大丈夫だよね？

でぶのハッピーバースデー

群像

特別対談

石原慎太郎×西村賢太

「文壇と豊饒な時代の記憶」

四方田犬彦×木村紅美

「ボブカットの寄る辺なき女性たち」

新連載

ブレイディみかこ

「ブロークン・ブリテンに聞け

Listen to Broken Britain」

群像 2018・3

いわさきちひろと堀文子

松本 猛

画家は没後50年経って消えなければ、歴史的評価が定まる、といわれる。いわさきちひろは今年、生誕１００年。１９７４年に55歳で死んでから44年が経過する。

私は、母であるいわさきちひろが没したとき東京藝大の学生で美術史を少しばかりかじっていた。息子のひいき目ではなかったと信じているが、ちひろの絵は美術的にも価値があると思っていたので、遺作展をどこかの美術館でできないだろうかと、いくつかの館にあたってみた。しかし、どこも門前払いだった。絵本画家の絵を美術として評価する感覚は当時の美術館はもとより、美術界そのものになかった。

そのとき私は23歳。常識も恐れも知らなかった。美術界のことを何も知らないまま、無謀といわれながらも父の協力を得て、自宅を半分壊して小さな美術館をつくることにした。3年後の１９７７年、住宅規模の「いわさきちひろ絵本美術館」（現・ちひろ美術館・東京）を開館させた。ちひろだけでなく、優れた（と私が判断した）絵本画家の作品も展示した。

それ以来、私はちひろと絵本画家の展覧会を数え切れないほど企画し、研究や評論を行うことになった。今では、どこの美術館でもちひろ展は人気で、絵本原画展もいたるところで開かれるようになった。今回書いたちひろの評伝『いわさきちひろ　子どもへの愛に生きて』（講談社）は、ある意味で44年間のちひろ研究の集大成である。

「いわさきちひろという画家がどのようにして誕生したのか」というのが評伝のテーマだった。ちひろの人格形成や画風の確立に影響を与えたものは何だったのかをあらためて考えた。今まであまり注目されなかった人も含めて、時代を追ってちひろと接点があった人物を洗い直し、影響を与えたと考えられる人を調べ直して、論を展開した。それが当を得ているかどうかは、読者の判断にゆだねたい。

資料を調べ、文章を書いている中で、私自身が興味を持つ人物が何人も登場したが、評伝の中ではそこに深入りすることはできなかった。しかし、わずかしか触れられなかった人でも、その人を調べることで、ちひろの生きた時代が私のなかで立体的に見えてきた。

本稿では、評伝では突っ込めなかった人物の一人、ちひろと同い年の画家、堀文子についてもう少し考えてみたい。

堀文子は現代の日本を代表する日本画家のひとりで、現在99歳。神奈川県立近代美術館・葉山で3月25日まで「白寿記念　堀文子展」が開催されている。ちひろ美術館の館長をしている黒柳徹子と大変親しく、「徹子の部屋」には黒柳をモデルにした作品「アフガンの王女」が飾られている。堀文子のモットーは「群れない　慣れない　頼らない」。その凛とした気品ある作品と生き方に対しては、黒柳をはじめ多くのファンがいる。

堀文子といわさきちひろは戦後すぐから画家として競い合っていた。二人は家庭環境も似ている。母親はともに信州出身で堀の母は東京の女高師（女子高等師範学校、現・お茶の水女子大学）、ちひろの母は奈良の女高師（現・奈良女子大学）を卒業している。二人とも当時の女性としては最高学歴である。堀の父は中央大学で教鞭をとるロシア史の歴史学者、ちひろの父は陸軍の建築技師だが、英語を学び、文学を志し、美術を愛するモダンな文化人だった。

堀文子は東京府立第五高等女学校（現・都立富士高校）、ちひろは第六高等女学校（現・都立三田高校）を卒業する。女学校時代から美術に関心を持ち、絵を描いていることも共通しているが、その後の歩みは微妙に違う。

ちひろは師事していた洋画家、岡田三郎助に勧められたのだろう、女子美を受けようとするが両親の反対にあい、断念する。一方、堀も女子美を目指し、父親には受験を反対されるが、母親のバックアップがあって入学する。堀の母は「お嫁に行って子を産むだけではなく、女が才能を伸ばして仕事をする時代がきたのです」という人だった。堀は、戦争で兄と弟を失い家も焼かれる。ちひろは家族こそ無事だったが、やはり山の手大空襲で家を焼かれ、命からがら生きのびた。

自由な雰囲気の家庭で育った二人が戦後、民主化運動や平和運動に接近するのは、必然だったのかもしれない。ちひろは疎開していた松本市から上京し、共産党の運動にかかわりながら、新聞記者をしたり、新聞や雑誌などにさし絵やカットを描いたりしながら、やがて何とか絵筆一本で生活するようになる。

ちひろが女子美を出た新進気鋭の日本画家、堀文子の存在を知るのはそのころである。ちひろが日本民主主義文化連盟（文連）発行の「働く婦人」で絵と文の連載を始めたころ表紙を描いていたのが堀文子だった。ちひろも堀の後、しばらくして表紙を描くようになるが、いろいろなところで二人の仕事は重なっていた。ちひろが、絵本（絵雑誌）の仕事をするようになってからも、二人は競うように同じ絵本に絵を発表したりした。共通の知り合いは山ほどおり、顔を合わせる機会もあったはずなのに、二人の間に交流はなかった。

評伝が出版された後、神奈川県立近代美術館の堀文子展を見に行って、若い時の絵本作品から、数々の日本画の代表作を、時代を追ってじっくり見た。絵に向かう姿勢の厳しさや、作品の凛とした美しさに心を打たれた。

あらためて、堀文子という素晴らしいライバルがいなければ、いわさきちひろも、現在のように評価される作品を残すことはなかったかもしれないという感慨を持った。若き日に二人の画家は互いの仕事を注目し、それぞれが切磋琢磨していたに違いない。

私はちひろから堀文子のことを一度も聞いたことがない。しかし、40代の後半に堀が出した絵本の傑作『き』を見ていたのは覚えている。『き』は谷川俊太郎が詩を書き、編集はちひろの代表作の絵本を何冊も一緒に作った至光社のオーナー編集者、武市八十雄である。武市はちひろとも堀文子とも大変親しかった。

15年ほど前のことだろうか、そのころ長野の県立美術館の館長をしていた私は、堀文子の展覧会を企画しようと考え、お会いしたことがある。その時、堀がかつて絵本の世界で仕事をしていたことや、ちひろと同い年であることは知っていたが、戦後すぐからのライバルだったことは知らなかった。別れ際にちひろのことを知っているかと聞くと「あの方は第六でしょ」と即座に女学校の名前を出したことを覚えている。堀文子も若いころ、ちひろを意識していたのだと思う。それから何年か時が過ぎて「芸術新潮」のちひろ特集号に93歳になった堀文子のインタビュー記事が載った。一度だけ会ったことがあるが、あまりにも昔のことなのでその時のことは覚えていない、と記事にはあった。女性の人権がなかった時代や、戦争の悲惨な経験の記憶を抱えて自分たちは生きてきた。ちひろが描いた子どもの瞳のなかにある哀しさは、乱世を生き抜いたちひろ自身の哀しさだ、と堀文子は語っていた。

残念なことに、高齢になった堀文子から、いま話を聞くことはかなわない。二人が親しく言葉を交わしたことはなかったが、互いの精神のなかでは、その存在は大きかったのではないかと想像する。

堀文子のような存在ではないが、別の意味でちひろが意識し、感慨をもっていろいろなことを考えたのではないかと思う女流作家がいる。それは信州出身で、やはり同い年、同じ時期に満州で生活していた藤原てい である。夫は作家の新田次郎、息子は数学者でエッセイストの藤原正彦。ちひろはおそらく藤原ていとの接点はない。その作品を読んだという確証もないから、評伝では触れていない。しかし、1949年に出版されたベストセラー『流れる星は生きている』を手にしなかったとは思えない。そこには満州からの引き揚げの壮絶な様子が描かれている。

評伝を書いてから見えてきたことや、評伝というスタイルでは書けなかったこともたくさんある。評伝の枝葉の部分のなかにも、いわさきちひろという人間を作り上げた要因は隠れている。創作が許される別の形で、またちひろについて書くことがあるかも知れない。